

私の投稿句の背景（令和七年七月例会）

（投稿句） 結びみせ揶揄ふ人やさくらんぼ

詩集団『渦』の人たち

北 洋一

そうか、これが大人の世界なのか。

大人になると言うことは、こういう世界の住人になるということなのか。それなら悪くはない。

さる地方都市で、ガリ版刷りではあったが『渦』という同人誌を出している詩集団に私が入ったのは高校三年の春だった。

定年退職がまだ五十五歳だった昭和の三十年代半ばのころである。

私と、もう一人、私をその会に誘ってくれた一年先輩の高等看護学院の学生の笠井さんの二人だけが二十歳前で、「綾さん」とよばれていた代表世話人こそ前年に市の職員を年満退職した方だったが、他はみんな現役バリバリの自称「若き詩人」たちであった。

いつも十四、五人が出席していた毎月の例会は、ブラジル珈琲の輸入商が長い間倉庫代わりに使っていたことを偲ばせる微かな香りが残っている古いビルの三階の、時間制の貸し部屋で行われていた。駅前から続いている大通りの並木のプラタナスが、歩道を越えてその三階の窓の近くまで枝を伸ばしていた。

笠井さんとは、彼女が力強い男勝りの詩を高校の文芸部誌に載せているのを見た二年生の私が、途中入部して以来の知り合いだった。

その頃の私はと言えば、藤村や上田敏や犀星などの好きな詩人の詩を書き写して、その紙片を手当たり次第に勉強部屋の壁に張り巡らしてはいたが、これと言って「詩」の何かを勉強をしていた訳でも無く、短詩を気儘にノートに書き溜めているくらいに過ぎなかった。

笠井さんに、私の気紛れなそれらの習作の一、二を見せたら、どこに興味を持つての事かは言わなかったが、それまでのものや、新しく作ったものを暇を見ては批評してくれた。私の作詞への思い入れは少しずつ膨らんでいったが、それにつれて私の笠井さんの凛とした顔立ちへの憧憬も膨らんでいった。

笠井さんに、初めて『渦』の例会に連れて行ってもらった日、会の冒頭、綾さんが私を紹介した。

「笠井さんの推薦で、会員になってもらうことにした北さんです。笠井さんの話によれば、若いがなかなかの人だということですので、皆さんよろしく頼みますよ。北君、君、何か挨拶するかい？」

新入りが何を言いだすだろうかと、好奇心を露わにした眼が、一斉に私に襲いかかってきた。私は手短に、

「こうした大人の方たちの会に加わるのは初めてです。純情な高校生ですので、お手柔らかにお願いします。趣味は映画鑑賞です」と言った。途端に、

「純情な高校生であろうがなかりうがそんなことはどうでもいい。作品の一つでも見せてくれればこっちが判断するさ。この会に入った

からには容赦はしないからな。君も、何の遠慮もいらんぞ。三葉虫の化石を集めている三十過ぎの山村だ。まだチョンガーだ。よろしくな」

「あらあら、山ちゃん、いつもの癖で直ぐに突っかかる。北さん、悪気はない人だから気にしないでね。それはそうと、甘っちよろいものを持ってきたら、私だって許さないわよ。電話交換手のミス畑中です。歳はーと、君の想像に任せるわ」

「こらこら、久し振りの入会者だぞ。この前のように、一回だけで退会してしまったらどうする！今の『渦』には新しい血が必要だといつも言っているではないか。新鮮な血がそんじよそこらに簡単にあらうはずはないのだから。北君、そういう訳でも大きな期待はしてはおらんので、気楽にな。とにかく顔だけは毎回出して、会費はきちんと納めてくれよな。俺はこの会の会計を担当している副世話人の伊藤だ。綾さんに次いで、と言ってもだいたいぶ離れてはいるが歳を食っている。おっと、もう一人、本当の古老の山部さんが別におられるけどね」

伊藤さんが、敬語付きで言った古老の山部さんという方は、その日の例会には出ておられず、私がお会いしたのは次の例会であったが、着流しで来ておられた。路の角にさしかかると、一度止まって直角に曲がる人だった。私がそれを目にしたのは、何回か後の例会終了後に、駅まで一緒に歩いた時のことであった。どうしてそのようにされるのかを聞いたら、「父親に躰けられたのだ」とだけ言われた。後になって、武士の作法であったことを知ったが、とにかく余計なことは何一つ言われない方で、『渦』には漢詩を出しておられた。

私への手厳しい注文の入った自己紹介が続いたが、中ほどで少し様相が変わった。

「北君よ、みんな勝手なことをほざいているが、ろくなものを書いておらん奴に限って小難しいことを言うんだ。さつき、大口を叩いた白川は、前の号に『心のくもり』とかいう自分勝手な思い込みを書いているが、あれなど詩ではない。まるで駄目だ」

「何、大山。そこまで言うんなら俺も言うぞ。お前の『現代人はお馬鹿です』あれはいったい何なのだ。あれこそ、落書き以外の何ものでもないぞ」

「また二人で！。何かケチを付けないと気が済まないのだから。北さん、びっくりされたものではありません？あの二人、この後の飲み会が楽しみで、ああやっているだけのことですから。はい、私は中谷です。主婦です。この会では、代表世話人の綾さんと、ほらあなたの先輩の笠井さんと、まあ私の三人くらいがまともで、他はみんな、一癖も二癖もある方たちばかりよ。でも、あの二人にしても食いつくまでのことはないから、心配はご無用よ」

あの二人と言え、『渦』の発足記念日のお祝いの宴があり、それに私も参加した時のことだった。何時ものようにケチを付けあっていたのに、ふと見ると肩を組んで「渦の朔太郎」がお前で、俺は「渦の宗治」だとか何とか言って二人して泣いていた。あの二人の複雑な思いを推しはかれるようになるには、私には未だ未だ時間が必要であった。

会員の自己紹介が一通り終わると、

「今日は、若いお客さんということでみんな、上品ぶって手加減し

た発言だったが、北君、みんなイイ奴ばかりだからね。では、四十八号の合評会と、今日発表予定の同人の作品の朗読に移りましょう。今日は、どっちからだったかな？」

綾さんが、話を引きとられた。ロの字型に配置されている長机の、正面の中央に座っている綾さんの右側から時計回りに、気になった作品の批評を述べ、批評された相手は、反論があれば反論をするという形式で会は進んだ。

批評し、批評された二人が折り合わず、議論が伯仲してくると、それぞれに応援団が付いて、それにまた火が付いて燃え上がる。出席していて、旗色を鮮明にしないでいると、「お前は、どっちの派なのだ」と今度はその人が責められる。

議論の中を「列島」とか「荒地」とか「四季派」などの言葉が飛び交っていたが、近代日本の詩史などに目を向けたことなどなかった私には全く疎遠な言葉であった。

生の感情をぶっつけ合うことに躊躇をしない人たちの時間だった。女性のメンバーたちも、その通りには書けないほどの物言いで疝高い声を出していた。議論が余りにも紛糾すると、綾さんが黙ってすっと立ち上がられる。すると一息入れるかのように収まる。そのまま次のメンバーの発表に移る場合もあるし、再び火が付く場合もある。未だ熱気が残っている場合である。

しかし、不思議なことに白熱の議論は、罵倒し合いながらも底抜けに明るいのである。

会が終わると、今度はもう笑い声があちこちで渦巻き、大人たちは女性会員共々そそくさと飲み会へ向けて階段を降りて行った。その落

差に、私はしばらく自分を取り戻せないほどだった

大人たちが揃って出て行った後、私は笠井さんと連れだって階段を降りた。ビルの外に出るとすぐに、笠井さんに聞いた。

「今日の例会で、私への自己紹介を、パス！と言ったきりで口を開かなかった、雑誌の中のモデルのような濃い化粧をして煙草を吹かしていたあの人はどんな人なの？」

笠井さんは

「あの人は三方さん。百貨店に勤めていて、その広報誌の編集をしている人」と、そっけなく答えた。そして、

「告げ口みたいでわたしイヤなのだけれど、何かと噂の多い人だから、北君、気をつけるのよ」と顔を赤らめながら言った。

会誌四十八号に載っていた三方さんの詩は、私が使ったこともない言葉で満ちており、そのような詩を書く三方さんという人には、笠井さんには感じたことのない大人の女臭さが、それが何なのかは実は私はまだ何も知ってはいなかったのに、あるに違いないと思った。

帰りに寄った笠井さんの家で、さりげない理由をつけて『渦』の直近の二、三冊を借りることにした。

笠井さんの家には、もう何度か行っていたが、行く度に、部屋の甘い匂いに息苦しさを感じ「笠井さん、硝子戸を開けてよ」と叫びたいくらいだったが、本当はその匂いに溺れていたという気持ちの方がはるかに強かったので叫んだことは一度も無かった。

笠井さんは会誌を手渡してくれながら、

「君、三方さんの作品を見たいのね」と言った。私は心中を見破られ、しどろもどろに

「ち、違います。か、笠井さんの最近の作品を見たいだけです」と言うと「そんな嘘を言わないでもいいのよ。男らしく白状しなさい」とピシヤリと言われた。

これは敵わないと思い、挨拶もそこそこに帰宅すると、そのまま自分の勉強部屋に腹這いになって、三方さんの作品のページを探し出して読みはじめた。三方さんの貌を盗み見るように思い出しては、読み返しているうちに下腹部に性的な興奮が高まり、その頃には経験のある行為に走った。途中で、笠井さんに悪いことをしているような気がして、今度は凜とした笠井さんの顔を思い浮かべて続けた。

ひと月後の六月例会では、三方さんが始終、議論の中心にいた。

居並ぶ男性会員たちを次々と小気味よくへこまし「勉強が足りないわね」と言われた白川さんなどは「もう、勘弁してよ」と手を合わせ始める始末であった。私に順番が来て、三方さんの作品にそれらしき感想を言うと、あの人は私を軽く睨みながら、「北君って、意外に大人なのね。見直したわ」と言ってくれた。私は嬉しかったが、笠井さんの眼が気になって何の返事もせずに、三階の窓まで伸びて来ていたプラタナスの若葉をうっとり眺めていた。

笠井さんとのその日の帰り道、その頃にはもう誰も居なければ手を繋いで歩いていた二人だったが、笠井さんは

「北君、あの人には本当に気を付けなければだめよ」と、握っ

る手に力を入れてこの前と同じことを言った。

私は熱い手を握り返しながら、

「僕が好きなのは笠井さんの、詩ですから」と自分にも言い聞かせるように答え、「いつでも逃げられるようにしておいて、そっと近付いてみるだけならいいでしょう?」と言ったら、笠井さんは、絡め合っていた指を振り解いて、口を利かずにどんだん先に行ってしまった。あわてて後を追いつけたが、その日はもう口を利いてはくれなかった。

帰宅した私は、例会の終わりに綾さんが「火曜日の六時から四十九号の編集会議をするので委員の方は忘れないようにね」と言っていたのを思い出した。笠井さんはそのことを私に何も言わなかったので委員ではないのだろう。私は火曜の集まりを覗いてみようと思った。と言うのも、私は中学生の時、新聞部に入っていたので編集と言う言葉に敏感に反応したのである。

綾さんが言っていた定刻を三、四十分ほど遅れて、いつもの部屋を覗いてみた。三つ四つ寄せ集めた長机の周りにいた人たちが、一斉に顔を上げ、入り口の私を怪訝そうに見た。

「中学校の校内新聞の編集をしていたことがあるので興味があったので来てみました」と手短かに言った。「邪魔はしませんから」とすぐに付け加えた。綾さんが、

「もう、ほとんど終わって雑談していたところだよ。こっちにおいでよ」と、空いている椅子を目で示しながら、机の上の籠に未だわんさと残っていたさくらんぼを一掴み取って渡してくれた。「親戚のさく

らんぼ農家から送って来たものだ」と綾さんがぼそぼそと言った。

言われた椅子の隣は三方さんだった。部屋に入った時、三方さんがいることには直ぐ気付いていた。際立つ化粧顔だったから分かったのだ。その向こう側には、いつも大声で話す大山さんがいた。それに、顔には覚えはあるが名前までは未だ思い出せない女性が二人だった。

『渦』のフォーマットは決まっているので、君がやっていたという新聞の号ごとの編集企画とは違って難しくはないんだ。巻頭の記事と会員の作品の掲載順序を決めて、後は、綾さんに一任、ということ編集会議を終えて駄弁っていたところだ」

大山さんは手短に言うのと、綾さんと二人で又何か話し始めた。

名前の思い出せない女性二人も何か話し合っていて、手持無沙汰みたいになっていた三方さんが私に話し掛けてきた。

「北君、今日は笠井君とは一緒ではなかったの？」 頷くと、

「そう、一人で来ることもあるんだ。いつも一緒みたいだけど。この前、入会時の自己紹介では高校生だと言っただけで他のことは余り言わなかったけれど、お家はどこの？ 趣味は何なの？ いままで恋愛経験はどうなの？ 笠井さんはガールフレンドなの、恋人なの？」と矢継ぎ早に聞いてきた。

私は笠井さんとのことは、

「高校の文芸部の先輩後輩で、そんなんではありません」と、言ったら

「そんなのとは、どんなことなのよ？」と笑って揶揄った。

私は真つ赤になって俯いていた。すると、さくらんぼを僕が持っているのを見て、追いかけるように、

「君、さくらんぼのヘタをお口の中で結んだことがある？」

私は、出来たこともあるので顔を上げて頷くと

「あれができる人は、キスが上手なのよ。君も上手なのよね、きつと。私も上手なのよ。確かめてみる？ いつでもいいわよ。笠井さんとはもう、キスしたことはあるのかな。きつとあるわよね」

そう言いながら、私の手からさくらんぼを取った。

舌見せて結びし人やさくらんぼ

結びみせ揶揄ふ人やさくらんぼ

私は、生身の性のことには晩生というか、臆病というか、笠井さんの家で襟足を綺麗だと褒めた時に「唇で触れてみていいわよ」と言われて、背後から肩を抱いてそつとそうしたぐらいであった。振り向いた笠井さんの眼と唇が、あの時メラメラと燃えて、私を待っているのに気付いたのに、慌てて目を逸らすことしか出来なかったというていたらくであった。

「三方さん、若い子をまた苛めて、駄目ですよ。さあさあいつものスナックに行きましょう。綾さん、先に行ってますからね」と、助け舟を出してくれた。

「今日は許してあげる。北君、君って純情なのね」と、もう一度揶揄って、大山さんとそれに二人の女性共々部屋を出て行った。

それから後のことは覚えていない。三方さんと本当にキスしたかのような何かふらふらした気分、綾さんに挨拶して帰ったのかどう

かも覚えていないという有様だった。

私は、編集会議を覗いたことを笠井さんには言わなかった。三方さんにキッスされたような気分になっていたことを秘密にしておきたかったからである。三方さんの「確かめてみる？」を思い出してはうつとりする日が続いた。

八木重吉に憧れて作っていた短詩を書き溜めていたので、その中から自分でも気に入っている作品を、私は次の七月例会に持って行った。「とにかく、早く作品を出せ、出せ」と副世話人の伊藤さんからせっつかれていたもので、約束していたのである。

それは、前に笠井さんに見てもらった時に「鮮やかな絵画的な作品ね。いいわよ」と言われていたものである。

春 北 洋 一

バイクに乗って

野良着の娘が

れんげ畑の向こうを走っている

もう見えない

初めて会に出した私の作品は、電話交換手の畑中さんの批評がそうであったように、女性会員たちから一斉に「甘い、甘い」の声が上がった。

「君ぐらいの齢の頃には、作った自分の詩でマスターベーションをするのよ。君もそうじゃない？ 野良着の娘とか、白いブラウスの少女とかを、広い原っぱに連れ出すのが好きなのよね。自分で自分の詩を読みながら恍惚感に浸っているのよ。覚えがあるはずよ」

女性たちの似た感じの批評が続いた後、

白川さんが、

「終いの『もう見えない』の一行は要らんものだ。折角の短詩の良さを終いの一行で殺している。俺なら三行で終わりにする」

すると、いつもの口論相手の大山さんが、

「そうになると、写真にしかない。終いの一行があつて、どうにか詩になっているのだから」

追って伊藤さんが、

「いや、要らない。三行目の後の四行目の空白の一行、あれがあれば十分短詩になる。五行目は要らない」

「その空白の一行をどうして現すか。五行目の『もう見えない』があつて初めて空白の一行が現れるのだから。おい、誰か、五行目を消して、四行目の空白を作る方法はあるか？」

私に、背景なり、真意を聞こうとする人など誰も居なかった。作詞者の私がそこに居るのにである。

「いや、ついでに一行目から三行目も全部消して空白の四行目だけを生かす方法はないか？ 題名と四行目の空白だけにするのだ。おい中村、お前は北園克衛の実験詩等を持ち出して俺たちをへこましたりしているが、どうなんだ。どうにかならないのか？」

言われた中村さんは

「題名と、四行目の空白だけにするのはそれはいくら何でも飛躍し過ぎだ。どうだ。五行目を絵文字にしたら」と言いながら、二編の短詩「春」を黒板に書き始めた。

春 北 洋 一 春 ○ ○ ○

バイクに乗って

バイクに乗って

野良着の娘が

野良着の娘が

蓮華畑の向こうを走っている

蓮華畑の向こうを走っている

もう見えない

△□△○▼◎

「これでどうだ」

「うん。下の作品でいい」伊藤さんが直ぐに賛同し、他の何人かも頷いた。

黙って聴いていた三方さんが、

「この作品は最後の『もうみえない』の一行で、れんげ畑と娘の映像を読手にもう一度蘇らせるというテクニクが佳く効いていると思うの。中々のものよ。それもこれも、皆さんが言っているように、空白の一行を置いているからよね。五行目を、『△□△○▼◎』表記にして読み手に投げ出すとして、さて、読み手はそこをどう読み、どのような余韻を四行目に作り出すだろうか」と、集約するように言った。

私は、絵文字を連ねるのには抵抗したが、次号には実験的に、私の原詩と、五行目を絵文字表記したものを上下に置いて載せ、解説文を

大山さんが書くことになった。

が、これは、私が初めて作品を例会に出すことを知った皆さんが半分は示し合っていて、新入りの私を揶揄ったものだったのである。

しかし、このことがあって私は漸く渦の一員になったように思う。次の例会から、私は誰の作品であろうと、その議論に加わって大声を上げられるようになったし、意見も求められるようになった。

例会が終わると、三方さんは帰り支度をしていた私の傍に寄って来て「野良着の娘さんって、幾つぐらいの人だったの？」と顔を覗き込んで来た。私は顔を赤らめながら「だったら、『祈り』のことを教えてくださいよ」と鸚鵡返しに言った。その日の例会に三方さんが持つて来ていた「祈り」という作品は、大人の男と女の間の性を濃密に書いており、私にはひどく刺激的なものだった。

その日も一緒に帰ろうと約束していたので、先に一階に降りて待つてくれていた笠井さんに謝りに降りて行った。

笠井さんは「あれほど言ったのに、私、もう知らないからね」とばかりの、きつい目で私を睨んだ。私はその目から逃れるようにして、三階へ駆け戻った。

三方さんに連れられて行ったのは「ドガ」という名曲喫茶で、観葉植物を並べて一般客席と切り離れた奥のコーナーの席だった。

三方さんは、私の「野良着の娘」については何も聞こうとはせず、

まるで私が「祈り」の中の相手の男性であるかのように「貴男が、奥さんと別れられないってことは百も承知の上よ」と畳みかけるように話しかけてきた。

「子供が大学生になるまで待てというのなら待つわよ。でも、そんなことじゃないのよ。何かしら、この頃の貴男には覇気が感じられないのよ。私たち何か悪いことをしているの？」

「うじうじしないで、胸を張っておればいいのよ。要は二人の問題なのだから。何と言われようが放っておけばいいのよ」

三方さんは、私には分からないことを愚痴っぽく次々と口にした。そのことの詳細を、実は、私は直ぐ後に知ることになるのだが、その時は唯々黙って聴いているしかなかった。

「ごめん、ごめん。何も知らない君に、日頃の鬱憤を吐き出してすつきりしたわ。お礼にと言ったらおかしいけれど、今度の日曜日、わたしの家に遊びに来ない？御馳走してあげるから。私、お料理も得意なのよ。」

「そうそう、作品を見てあげるから持って来なさいよ。君には、何か私にはもう無くなったものがありそうな気がしてならないのよ。いいものがあればうちの広報誌に載せてみたいの。湾が足元に見える高台にある青い屋根の家だから、すぐわかるわよ。さくらんぼの樹は無いけれど、桜の実が熟れている大樹があるから結び合いっこは出来るわよ」と言った後、

三方さんは、私の頬を両手で挟んで引き寄せて唇にふれ、私を真っ赤にさせ、「でも、このことは誰にも、君の先輩の笠井さんにも言った

らだめよ」と言った。そして、聞きもしなかったのに二十七歳であることを教えてくれた。

日曜日の時間等を決めた後、別れ際に三方さんはもう一度、今度は時間をかけて私を本当に真っ赤にさせると、自失している私を置き去りにして、何事もなかったかのようにコーナーから颯爽と出て行った。

日曜日、私は、清書した作詞ノートを持って、湾を見下ろす高台に三方さんを訪ねた。言っていたように、熟した実を付けた桜の大樹が庭にある青い屋根の家に、三方さんは独りで住んでいた。

私を出迎えた三方さんが姉さん被りだったのには驚かされた。

桜の実の熟す大樹や打ち薫る

桜の実熟して大樹噓せ返る

短い夏と秋が、慌ただしく過ぎて行きすぐに卒業が来て、私は、私に建前でない本音の大人の世界の入り口を見せてくれた詩集団『渦』の人たちと別れてその街を出た。

はてさてその後、私は詩集団『渦』の人たちのようなあの生き生きした大人の世界へたどり着いたであろうか。返事に困る。

(2025. 7. 31)